

建築家の あかりコンペ 2009

Architecture
Lighting
Design
Competition
2009



受賞者一覧

募集作品テーマ

日本のあかり

NIPPON NO AKARI

審査委員長

芦原 太郎

(建築家)

審査員

内原 智史

(ライティングデザイナー)

藤本 壮介

(建築家)

堀木 エリ子

(和紙ディレクター)

前芝 辰二

(大光電機株式会社 代表取締役社長)

特別審査員

出江 寛

(社団法人日本建築家協会 会長)

主催 / 社団法人日本建築家協会・大光電機株式会社

後援 / 社団法人日本建築学会・社団法人日本建築士会連合会・社団法人日本建築士事務所協会連合会・株式会社新建築社・株式会社日刊建設通信新聞社



最優秀賞



中村 雅子

Nakamura Masako

株式会社タジュール 代表取締役

プロフィール

1960年 東京生まれ

1984年「Casappo & Associates」

「Plastic Studio & Associates」等の

インテリアデザイン事務所に勤務後、29歳で独立。

その後3年間バルセロナへ移住し、

ヨーロッパの建築を巡礼する。

2007年 株式会社タジュールに改組 代表取締役就任

商業施設から住宅のインテリアデザインと

建築の設計監理業務に従事。

作品名：光のテキスタイル

一空間の中で照明の存在は消え、マテリアル自体が光を獲得する一

夜には夜の“ひかり”で cozyな住まいを

空間のシーンごとにテキスタイルを使って提案します。

建築が構成する 天井・壁・窓などの面に

光を組み込むことで、空間ボリュームをより感じることが出来る。

ここでの光は室内の仕上げ(マテリアル)のひとつとなる。

・バスルームの天井には星空が浮かぶ

・和室には低い位置にさざなみのような光がきらめく

・ダイニングでは窓のガラスにしゃぼん玉のみずみずしさが光る

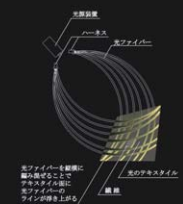
これらはテキスタイルに光ファイバーを織り込み

グラフィカルな手法で空間に光を与える。『光のテキスタイル』となる。

光のテキスタイル

一空間の中で照明の存在は消え、マテリアル自体が光を獲得する一

テキスタイル(壁・天井)に光ファイバーを織り込み
照明としての存在を消す
様々な空間・シーンに合わせた位置に光を創り出す



優秀賞



竹内 申一

Takeuchi Shinichi

竹内申一建築設計事務所 主宰

プロフィール

1968年 愛知県生まれ
1990年 東京藝術大学美術学部建築科卒業
1992年 東京藝術大学大学院修士課程修了
1993年 伊東豊雄建築設計事務所 入社
1993-2004年 伊東豊雄建築設計事務所
2005年 竹内申一建築設計事務所設立
現在 東海大学、日本大学非常勤講師

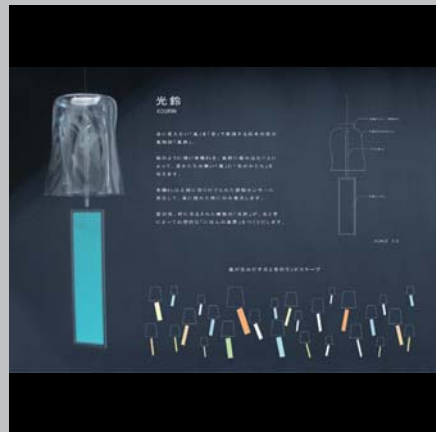
1991年 SDレビュー1991 入選

作品名：光鈴

目に見えない「風」を「音」で表現する日本の夏の風物詩「風鈴」。

紙のように薄い有機ELを、風鈴に組み込むことによって、姿かたちの無い「風」に「光のかたち」を与えます。
有機ELは上部に取り付けられた振動センサーに反応して、風に揺れた時にのみ発光します。

夏の夜、軒に吊るされた無数の「光鈴」が、光と音によって幻想的な「にほんの風景」をつくりだします。



優秀賞



近 智行

Kon Tomoyuki

マリモ・デザイン・アトリエ 代表

プロフィール

1966年生まれ
1990年上智大学理工学部機械工学科卒業後、株式会社LDヤマギワ研究所に勤務し照明デザインに携わる。
設計事務所勤務を経た後、2003年独立。
同年、マリモ・デザイン・アトリエ設立。店舗設計を中心に活動。

作品名：UKIZUKI -浮月-

電灯はおろか、ガス灯も無い時代のアンビエント照明は唯一「月」であったはず。夜空の月を愛でる一方、池に隣接する楼閣建築の在り方からは、権力者達が「水面に映る月」に特別な想いを抱き、これら「装置」を建てていた事がうかがい知れます。しかしこれは庶民においても、桶に汲んだ水や、雨上がりの水溜りですら得る事のできる明かりでもあったはず。

生活空間の全てに照明が備わっている現代では、このような発想が殆どない事に加え、住宅環境からも不可能に近いという事も事実。
先人達が追い求めた「月を掬(すく)う」という行為。灯りを全て消した空間で、この「UKIZUKI-浮月-」ひとつを灯すことによって感じる事ができるかもしれません。



特別審査員賞〈出江賞〉



荻原 雅史

Ogiwara Masashi

一級建築士事務所
荻原雅史建築設計事務所 主宰

プロフィール

学歴
1978年 長野県生まれ
2004年 京都大学大学院工学研究科修士課程修了
2004年-2008年 高松伸建築設計事務所勤務
2008年 荻原雅史建築設計事務所設立

作品名：MUSUBI

日本文化の基調は、面による構成を基調とした西洋文化と比して、線による構成であると言える。

建築で言えば、柱、梁を基本とした木軸工法がそうであるし、町家に見られるファサード格子にもその要素は見えてとれる。
古くは竹籠が籠目(カゴメ)と呼ばれる線材によって編まれていたし、和装における組織物も生糸による線の構成である。冠婚葬祭に渡される御祝儀、香典などには水引が付けられる。

古来より日本におけるあらゆるものはこの線の要素を基調とした「結びつき」で成立していると言うことができるかもしれない。

今回の募集テーマである「日本のあかり」として、何ものにも拠らない、純粋な「あかりの線」が相応しいのではないかと考えた。



佳作賞



久保 貴史

Kubo Takashi

建築設計事務所 no office 代表

プロフィール

1973 大阪府生まれ
1992 大阪府立住吉高校卒業
1997 京都工芸繊維大学造形工学科卒業

2001 無事務所デザイン組織 no office
2005 建築設計事務所 no office に改組
2009 建築ユニット bangle を共同

現在は住宅・インテリア・プロダクトデザインを中心に活動中

作品名：electrical knit

建築家は絶えず新しいモノを作らなければいけない呪縛に囚われている。然しその実、解決法は科学者や材料工学者、各種のエンジニアにそのほとんどを依存している。では、建築家は何をすべきであろう？

この「あかり」は新しくない。どこにでも入手できる電球型蛍光灯と電気コードを手で編むことで、誰にでも作ることができる照明器具なのである。電気コードは編むことでシェードとなり、電力を供給しながら、また、光を拡散してくれるだろう。

「日本のあかり」とは、「建築家のあかり」とは、目の前にあるモノに「愛着」や「愛情」といった見えない感情を加えることで完成する、「こころのあかり」ではないだろうか？



佳作賞



久保田 英之

Kubota Hideyuki

久保田英之建築研究所 代表

プロフィール

学歴
1987年 名城大学理工学部卒業

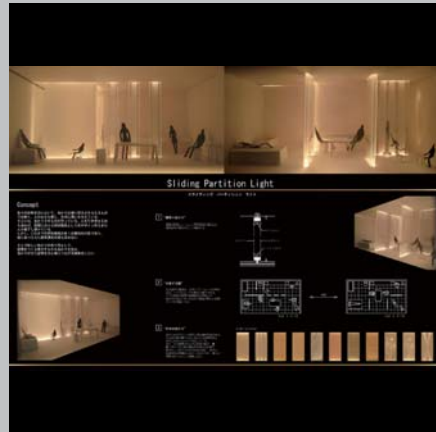
職歴
1993年 久保田英之建築研究所設立
名城大学・金城学院大学非常勤講師
2005-2007年 日本建築家協会優秀建築選
2006年 三重県建築賞
2008年 エアスタイルコンテスト入賞

作品名：Sliding Partition Light

日本には引戸という世界に稀な建具文化がある。いわゆる襖や障子などに見られる空間の仕切り方は日本人の持っているDNA文化と言ってよいだろう。そこで、自由に可動でき、パーティションにもなりながら照明器具として成立するシステムの提案をします。

天井に電気配線が使われるダクトレールをスリット状に埋込み、床にもダクトレールと同位置にV型レールを埋め込んでおきます。そこに床から天井までの建具(WALL)を制作し、内部にはシームレスランプやLEDの照明をセッティングしておきます。スクリーン(表面仕上げ)には、和紙・木格子・アクリル板・摺りガラス・簾等を取り付け、その建具(WALL)をダクトレールにはめ込むと建具(WALL)自体に電気が通り、照明器具としての壁(WALL)が出来あがります。

ダクトレール内は、空間の使い方によって建具(WALL)を可変し、フレキシブルに対応できる空間一体型の癒しのあかりになると考えています。



佳作賞



山本 充彦

Yamamoto Mitsuhiro

有限会社ユー・アール・ネット
代表取締役

プロフィール

1961年 和歌山生まれ
坂倉建築研究所東京事務所にて多くの公共施設、商業施設の設計監理に携わる中で「ことづくり」の重要性を感じ、2001年に独立。
ストック型社会におけるモノの在り方について悪戦苦闘中。豊かなコミュニティの再構築に向けても、NPO活動等を通して実践中。

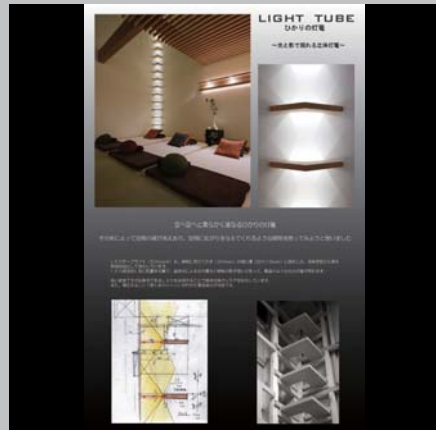
作品名：LIGHT TUBE ひかりの灯籠

～光と影で現れる立体～

・照明によって入隅という縁を消して限られた空間に拡がりを与えられないだろうか…
・照明の光自体にろうそくのような柔らかな形が与えられないだろうか…

そんな考えのもと試行錯誤を続け、今回の照明が出来上がりました。

LEDの直接光によって入隅の壁面の影は消され、空間に連続性が出ています。そして光の濃淡と柵板の影が混じりあって、飄々のような光の灯籠がぼんやりと現れ、照明の光自体に立体的な形を与える事が出来たと思います。影をつくる柵板や壁面の材質、それに照明の当て方を変えることで、様々な光の立体づくりが可能です。



佳作賞



秋田 憲二

Akita Kenji

HAK.Co.,Ltd 代表取締役

プロフィール

学歴
昭和54年 芝浦工業大学 建築工学科卒業
職歴
昭和62年 秋田憲二建築設計工房設立
平成08年 K設計へ名称変更
平成16年 HAK.Co.,Ltd. 設立
資格
昭和57年 一級建築士 登録第162504号
日本建築家協会会員/登録建築家

作品名：一期一会

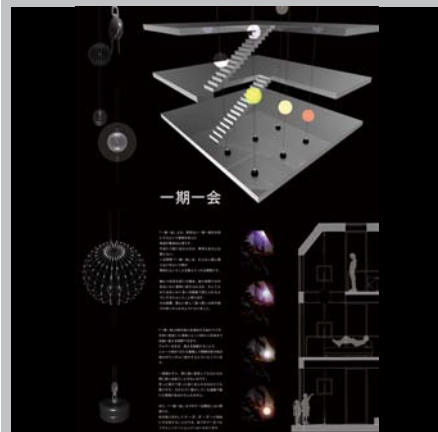
「一期一会」とは、何気ない一瞬一瞬を大切にするという意味を含んだ茶道の筆頭の心得です。

今当たり前にあるものが、明日もあるとは限らない。

この作品は、そんな二度と戻らない今という時が特別だということを教えてくれるあかりです。

「一期一会」は、吹き抜けを演出する照明です。
天井に設置した滑車によって床から天井まで自由に高さを調節できます。
ワイヤーを引き、高さを調節することで、シェード内のLEDが連動して照明の色や光の強さがランダムに変化するようにしています。

一度動かすと、同じ高さに設定してもなかなか同じ色に出会うことがないのです。
それだけに、動かしている過程で新たな発見があるかもしれません。



佳作賞



松村 哲志

Matsumura Satoshi

AMBIENCE ARCHITECTS
一級建築士事務所 代表
日本工学院八王子専門学校建築設計科
・建築デザイン研究科

プロフィール

学歴
1997年 日本大学生産工学研究科博士前期課程建築工学専攻 修了
職歴
1997年 4月～2002年10月 林国美アンドアトリエール
2003年 1月 aMa architecture design partners 共同主宰
2005年 3月 AMBIENCE ARCHITECTS 一級建築士事務所 主宰
2005年11月 日本工学院専門学校 建築設計科
2008年 4月 日本工学院八王子専門学校 建築設計科
・建築デザイン研究科

作品名：ホノカナアカリ

日本の住まいのあかりはもっと暗くてよいと思う

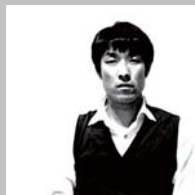
隅々まで明るすぎる事は本当に豊かな灯りなのだろうか？

月明かりに照らされた障子の様にボーと明るく全体として面的にひかる灯り
様々なその他の灯りの影響を許容しながら優しくも、暗さを楽しむ灯り
そんなホノカナアカリを目指す

この提案は屏風状の形態をしたアンビエント照明である
光源には有機ELを採用し、その弱点を利点とする発想の転換がある
ホノカナアカリは情報にあふれたすまいに余白を与えるようにデザインされている



佳作賞



今井 勝英

Imai Katsuhide

I.M.A. 代表

プロフィール

1969年 名古屋市長生
1992年 名城大学理工学部建築学科卒業
2000年 I.M.A.開設

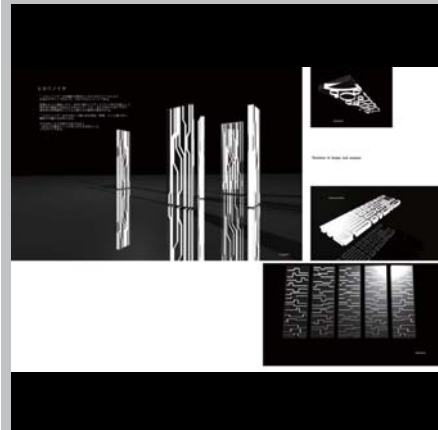
作品名：ヒカリノイタ

”ヒカリノイタ”は有機ELを帯状にしたものをアクリルにより
自由なデザインでFIXした、ひかりの要素である。

屏風のように連結したり、水平に寝かせてディスプレイ用の什器として、
間仕切り壁面にはめ込んで光のレリーフに、また天井から吊り下げて
演出用の照明器具としてなど様々な可能性が想定される。

”ヒカリノイタ”はその向こう側にある景色、時間、ヒトと溶け合い
曖昧で不確かな存在となる。

それはあくまで空間の主役ではなく
一歩ひいた脇役としてのありかたを目的とした
プロダクトである



審査員講評



審査委員長

芦原 太郎 (建築家)

建築家のあかりコンペは今年で三回目を迎え、作品総数も昨年のほぼ倍となる101点となりました。会員のみならず、会員が属する事務所スタッフも参加可能になったことありますが、このコンペの認知が上がってきている結果だと思います。

建築家というのは、常に創造的に物事をとらえ、生活に反映させてゆくことを率先して進めてゆく任務があると思っています。今回のコンペでは、照明技術の変化をどのように人間の創造的生活につなげているのかということがポイントになるのではないのでしょうか。提案の多くはグラスファイバー、LED、有機ELといった新しい技術を用いたものでした。その上で、最優秀賞の中村氏はテキスタイル、竹内氏は地域、環境といった視点を明確に持ち、建築家らしい提案をされていた点を評価しています。

今回審査をしながら感じたことは、アイデアをとるのか、商品化の可能性をとるのかという点です。今年は昨年の審査委員長出江会長の総評の反映なのか、アイデア重視の提案がとて多くありました。是非来年からは、アイデア部門、商品化部門を分ける、もしくは選ぶ際にそういった枠を持たせて審査する、といった明確な落とし所を設けて行えば、更にこのコンペの狙いが鮮明になってゆくのではないかと思います。このコンペが引き続き行われ、更に発展してゆくことを心より願います。



審査員

内原 智史 (ライティングデザイナー)

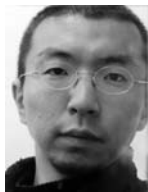
環境問題など、白熱灯の一部の光源にエネルギー効率の悪さゆえの矛先が集中し、LEDが過剰に取りざたされる昨今。光が常に経済効率だけで語られてよいものかはわたくしの職業柄からだけでなく、日常生活全般にかかわる「照明」だけに気になるところです。

時代のニーズによって新しい光源が多くのクリエイターの関心を集めることは、もちろん大いに歓迎すべき現象ですし、とりわけ空間をデザインする建築家の手によって、光の魅力そして可能性が建築空間の中心にさらに位置付けられることを願ってやみません。

形あるものは常に、我々の視覚情報の大部分を占めているようにとらえられがちですが、そのすべての形態が光を媒体として「伝わる」かぎり、すべての視覚表現は光の中に存在するといっても過言ではありません。しかもその定量的な形態情報が情緒的印象をともなって価値を高めたり、人間の創造性を喚起する波動(エネルギー)に変換されることも光の現象であるといえます。

建築内部の一つ一つの空間から外観全体においても、「器に光を注ぎ込む」ような、心洗われる、心温まる作品との出会いを毎年楽しみにさせていただいています。

審査委員講評



審査員

藤本 壮介 (建築家)

このコンペの面白いところは、単に建築家が照明器具を考えるということを超えて、明り、光とはどういうかたちで僕たちの日常生活と関わることができるのか、その可能性を、手のひらに乗るようなスケールから建築、そして都市スケールにまで広がるビジョンとしてみることができる点にあることを実感した。

1等の中村案は布の中にグラスファイバーを織り込むことで、住空間の中に意外な形で光を共存させる。かすかに滲むような気配のような光が、室内に流れ込んでくる。その空間のイメージが美しかった。

久保案は、コンセプトが面白かった。僕たちが普段目にしているソケットと電球とコードという照明の最小限の設えから、編む、という行為によって、魔法のように生み出される存在。日常からの一瞬での飛躍。しかしプレゼンテーションのときに持参してくれた実物は、その飛躍が徹底されていなかったような気がする。サイズや細部の作り方によっては、あるいは見せ方によっては、すごく面白いものになったのではないかと思う。

竹内案は僕が一番好きな案だった。風鈴と明りを組み合わせるという視点は、ロマンチックにすぎたかもしれないが、それらが都市の中に広がっていった、小さな照明器具が都市のライトスケープを作り出す、というイメージの広がりがうれしかった。最新のテクノロジーと自然の風、そして変わらぬ僕たちの日常をつなぎ合わせる提案だと思った。



審査員

堀木 エリ子 (和紙ディレクター)

今回のテーマは、「日本のあかり」。さぞや和紙や竹や漆といった日本の伝統素材を使った作品が多いのだろうと思って一次審査にのぞみましたが、意外なことに、和の素材を使った作品は少数でした。全体的に、素材に頼らない切り口や考え方が盛り込まれていたという意味では面白いコンペになったと思います。

最優秀賞の「光のテキスタイル」は、照明器具という「物」としてのとらえ方ではなく、空間を構成する壁や天井、窓などの大きな面が光するという「環境」としての提案であり、いろいろなファイバーの種類や多様な織りの手法が加わることで空間演出の幅が広がっていく可能性を感じました。

優秀賞の「光鈴」と「浮月」は、実用的な照明器具ではなく遊び心が溢れた作品。情緒や情感といった日本独自の美学を形にしている「日本のあかり」というテーマの解釈が面白いと思います。

日本の伝統素材を使わなくても和の表現はできますが、私は伝統素材である和紙の世界で仕事をしているので、「日本のあかり」というテーマでのコンペにおいて、二次審査に残った作品に伝統素材がまったく無かったことには寂しさを感じました。

同時に、日本の伝統素材に対する興味が希薄になっていたり、その扱い方が解らないということに対して、日本の伝統産業の継承についての危機感を新たにしました。伝統素材が、伝統的な手法だけとどまらず、現代の最新の照明技術を取り入れて新しい可能性を広げていくことの必要性をしみじみと感じた審査会でした。

審査委員講評



特別審査員

出江 寛 (社団法人日本建築家協会 会長)

「建築家あかりコンペ2009」はJIA全国大会京都で開かれた。テーマは“日本のあかり”であり、京都の風土にもピッタリであった。アトラクションでは先斗町の舞妓が祇園小唄であでやかな舞を見せていただいたが、舞台が煌々と明るすぎ谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」の薄暗い中での舞妓の怪しげな美しさを堪能出来ず残念に思っていた時、

- ・ 中村雅子さんの「光のテキスタイル」で出来た茶室風の薄暗い天井には星が輝き、足元にはさざ波のような光が美しく、このなかで舞妓を舞わせれば、きっと異次元の美しさを堪能出来るだろうと思った。
- ・ 竹内申一さんの「光鈴」は日本の風の気配を音で表現する風鈴に対し、風の気配を「光」で表現しようとするものでこれは面白い。紙のように薄い有機ELの短冊が風に揺れると発光するもので、お祭りや各種イベントに使うと美しく幻想的な空間が広がり楽しい。
- ・ 近智行さんの「浮月」は足利義政の銀閣寺の「銀砂灘」(湖に見立てた砂庭)に「向月台」(砂の円錐上部を切った形)上部を月に見立て、水面に映る月として酒盛りをしたが、庶民に出来るものではない。そこで盆に水を張り「月を掬う」の美学を室内で楽しもうというもので面白い。
- ・ 萩原雅史さんの「MUSUBI」<出江賞>結びは冠婚葬祭の御祝儀、香典などの水引等、古来より日本におけるあらゆるものはこの線の要素を基調とした「結びつき」で成立している。これを光として表現して。あらゆる場所でのイベントのシンボルとして使え、新しい日本の表現として文化的である。